

『農』と親しむ こころ豊かに

昨今、世の中は戦慄をおぼえるような大事故や大事件が続発し、心の安んび感が脅かされています。「農」についても、厳しさだけが声高に喧伝されることも世情の上では当然かとも思われます。しかし、このような時代だからこそ日々の営みに心のゆとりを涵

養し、明日へ向けての夢を育てていくことが大切に思われます。それぞれの環境や事情を克服しながら、前向きに活躍されている農業者の方々が数多くおられます。本号では、そうした方々の中から北海道内各地、各層の皆様の生き方を紹介します。(編集部)

入植十年 喜怒哀楽

北檜山町丹羽 大津 美保子

(1)

今春から、二番目が小学校一年生です。姉二人と通います。片道を五キロ、自転車と徒歩通学は、子供たちを大きく、元気に育ててくれます。やはり、一番上の子は大変でした。二年間一人で通ったのですから。

四番目を保育所に車で送ってから、一歳の子を連れて牛舎へ行きます。一歳になったばかりの娘、歩くのが楽しそうです。自分の履いている靴が珍しくて、前に進ま

ないのですが。

雪が融けて「忙しい忙しい」とほやかないで、今吹く風や、すきとおる青い空、そして、この草木の新芽の香りやささやきを、春の感覚を、軀全体で感じとりたいたいと思います。

十年前の六月、開発公社の斡旋により、この北檜山の地に入植しました。当時、子供は生後八カ月の娘一人でした。

娘が四歳になって、保育所に入



大津 美保子（おおつ みほこ）さん

1978年宮城県立農業短期大学畜産科卒業。同年、園芸関連の企業に就職したが、北の自然へのつよ思いから退職をし、79年酪農実習生として渡道、上川町で酪農の実践を体験する。1982年短大の同級生だった良夫さんと「牧場結婚式」を挙げる。1985年北海道農業開発公社の農場リース事業によって北檜山町に新規就農で入植。当初は7頭の牛飼いで出発する。

現在は21haの土地に乳牛40頭（うち搾乳牛25頭）を飼育する酪農をご主人と共に営む。

5人のお子さんの育児と合わせて、ボランティア活動やミニコミ紙「モー・モー・メッセージ」、家族新聞「丹羽 MESSAGE」の編集、発刊など役割と活躍中のヤングミセス。

(お住まい：瀬棚郡北檜山町丹羽451)

るまで、私には話をする友達はできませんでした。子供を通しての友達も、話題も共通性があり、楽しいものだと思いました。

そして、この時、私は思いました。子供は私にとって、なくてはならないものだ。辛い時、失敗した時、子供たちは私達夫婦を助け、明るさを分けてくれました。子供たちに感謝しています。これからは、何があっても子供たちの為に考えようと思いました。それは、子供たちを過保護にするのではなく、大自然の中で、農業を通して、共に生きていこうということです。自分たちの考えや智恵を教え、体験を伝え、文通や奉仕活動なども、一緒に続けていくことです。そして、自立への力を導いてやることだと思いました。

(2)

年一回は、両方の親が、東北から遊びに来てくれます。短期間の休日を利用して来るのだから、ゆつくりと過ごして行つてほしいと思います。しかし、実父や義母は、草刈りや畑仕事で忙しく動き廻り、

家の周りをきれいにしてくれます。子守りを頼む実母に四〜五年前までは、こんなことをよく言われました。

『こんな小さな子供に、牛舎の手伝いをさせるなんて、かあいそうなこと』。

でも、毎年来るたび、子供たちの成長をみた実母は、私達の気持ちをわかってくれたみたいです。今では、実母のほうから、『牛舎へ行く時間だよ。頑張つてい』。

と子供たちに声を掛けてくれます。子供たちの牛舎でのお手伝いは、哺乳と草やりです。休んだら、仔牛は腹をすかせて啼くでしょう。そして、お父さんの仕事が増えて時間もかかるとしよう。

四歳、六歳、八歳、十歳の子供たち四人で話し合つて、作業を分担したり、別の手伝いもします。

この冬は、一人づつ次々と風をひき、元気な子供が牛舎へ手伝いに行きました。十歳がスキーで右手首を折つて、ギブスをしました。が、左手で十分に手伝いはできました。怪我は怖いですが、姉弟の

思いやり、協力など、また一人の勉強になったようです。

悪いほうに考えず、良いほうに考え、何かひとつでも学びたいものです。

農家でしかできないお手伝いは、子供たちを自立に導く、絶好のチャンスです。

『何んで、牛飼いが好きになつたのよ』。

なんて、文句らしいことを言つて、お手伝いをいやがる時もあります。宿題があつたり、日記に時間がかかつたり、マンガを見たり、時間厳守は大切なことですが、子供たちに任せたい以上、あまり口出しせず待つことにします。

塾や習い事は一つもせず、テレビやレジャーゲームをつけない我が家の、ささやかな楽しみなのでから。

(3)

毎年子供たちを連れて、東北の実家へ帰ります。六歳は、実家に牛がないので不思議がります。八歳は、『牛舎に行く時間だなあ』と、時計を見ます。十歳は、『牛舎

へ行かないと、変な気分』と、戸惑っています。

牛舎のお手伝いを、毎日の習慣にしてしまうと、やらないと気が済まなくなるのです。

去年は、七月から十一月まで、分婉がありませんでした。

お父さんが出かけて、帰りの遅いある夕方。
子供たちの会話です。

四歳・『もう、牛舎へ行く時間じゃないの』。

六歳・『いや、いつもは、もう少し遅いよ』。

八歳・『だって、哺乳する仔牛いないもの』。

十歳・『搾乳してる牛も少ないんだよ』。

四歳・『らくちんだね。少し休めるね』。

私も、子供たちと同感です。経営が成り立てば、金銭的な贅沢はしたくありません。それより、心と時間のゆとりが、今、一番ほしいときです。子供たちとの時間は、あとで取り戻すことはできません。単身赴任の長かった父を思うと、家族一緒にいられる農業は、あこ

がれでした。

私達は、牛乳が大好きです。搾りたての牛乳が、毎日飲めて、親や友人にも分けてあげられることは、最高の喜びです。

四歳は、姉の友達が来ると決まっています。

『うちのお父さんが搾った牛乳なんだよ』。

六歳は、牛乳が飲みたくなると、『お父さんの搾った牛乳、ちょうだいね』。

と、叫びます。

『買った牛乳なんて、家にはないのにね』。

と、皆んな、笑います。

手作りのバターやチーズ、ヨーグルトを使って、お菓子を作っていると、家族や友人の笑顔が浮かびます。皆んなに差し入れすることも楽しみの一つです。

酪農家ならではの醍醐味です。

(4)

牛はもちろん、犬や猫、うさぎや鶏のたくさんの動物達は、私達の家族です。子供の成長に伴って、もっと家族を増やしたいと思いません。



写真は▶

左から舞さん

(10歳、スキーで怪我をして風邪もひいています)

京ちゃん(4歳)、

将くん(6歳)、琴ちゃん(8歳)、

あゆみちゃん(11カ月)。

大津さんの可愛いお子様たちです。

ここは、季節保育所で、一二月まで休みです。冬は、山でスキームで休まずが、とにかく牛舎へ行つて、動物達との触れ合う時間は長いのです。六歳は、あきれる程の動物好きで、雪の中、牛舎で抱き合つてごろがるのです。それが、二人の挨拶になつてゐるようです。

お父さんも、搾乳は、猫や鶏を肩に乗せて、何やら話をしながら始めます。

私も、何回目かの産後、マタニティーブルーで気が滅入り、その時、牛舎へ足を運びました。牛舎へ顔を出すだけで、動物を見るだけで、気持ち落ち着き、はげまされたものです。

ネコをなでたり、イヌを散歩に連れていくだけで、血圧が下がったり、精神が安定したりするそうです。動物との触れ合いもまた、私達を育ててくれ、心を豊かにしてくれるようです。

我が家は、小さな町から五キロも離れた山奥にあるので、子供たちは、毎日友達と遊ぶわけにはいきません。遊び相手は、姉弟が働

物か、自然です。

(5)

牛飼いを始めて、まだ十年ですが、すばらしいところが覚えてきました。そんなゆとりも、できてきたのでしょうか。

子育てをするには最高の環境です。搾りたての牛乳が飲めます。そして、動物と共に暮らせるのです。

好きで始めた牛飼いなのに、辛くも思つたこともたくさんあります。それを逆に、自分の武器にしていきたいものです。そして、ストレスを上手に解消して、楽しく生きていきたいものです。

入植当初は、知つた人のいない土地で、淋しくてよく泣いたものです。赤ん坊をおぶつて、上の子の手を引いて牛舎へ行く、夢を追う夫は、とても輝いてみえたものです。

そこで、私は友達がほしいと思ひ、たくさんのペンフレンドをつくりました。手紙を書いて、外に出なくてもたたくさんの友達ができて明るくなりました。子供と一緒に

に書けるので、返事が来ると子供も喜びます。

特に、私のペンフレンドは高齢者が多くて、相手の方も、私の便りを心待ちにしてくれました。年寄りのいない我が家では、学ぶことも多いものです。

義父の一周忌で、夫が八戸に帰つてた時、近所のおじさんに朝の搾乳だけ手伝つてもらいました。その日、札幌に出かけるというので、

『牛臭くさせてごめんね』。と、言つと、おじさんは、『牛乳臭くなつただけだ、気にしてないよ』。

と、白い歯を見せて笑つてくれました。四十年以上の牛飼ひ人生のおじさんからは、もつと学ぶべきことがありそうです。

(6)

十年の間に、五人の子供を出産し、なかなか出かけることも難しく、牛舎と家との往復の日々が続きました。世間とのつながりもなぐ不安に思つていました。

新聞、雑誌に投稿が始まり、ボ

ランティアも考えました。しかし聞いたり読んだり情報は、自らが体験したことには及びません。

そこで行動を起こすことにしました。それが、子連れの老人ホー△慰問と、「モー・モー・メッセー」の新聞です。

もしも、見知らぬ土地に入植しなかつたら、五人もの子供が授からなかつたら、文通も投稿もボランティアも、私の力にはならなかつたでしょう。

そして、自らが作り出す自由な時間がある農業だからこそできることだと思ひます。

地位やお金などほしいと思ひません。きつと、大自然の中で、子供たちと生活しているからでしょう。誰でもそう思うはずです。

今の私達に感謝し、そのお返しを、社会奉仕としたいものです。そして、今の幸せを、他のたくさんの人々にも分けてあげる為、我が家にご招待をしたいと思つています。



モー・モー・メッセージ



1995・3 No.19

「どうですか 乳牛の看板」

— 他の農家からも制作依頼も —

村上 経子著

牛舎やサイロが点在する高台、通称「ガンビ岳」の中腹にある一軒の酪農家の牛舎の正面に、人目をひくホルスタインの看板がある。これは瀬棚町の村上信夫さんの妻、経子さん(36)の作品だ。経子さんは、特別絵の勉強はやっていたわけではなかった。

たまたま酪農実習先で見たプロがかいた看板を自分の家にもと、十年ほど前からかきだしたという。最初は鉄板にかいていたが、アメリカで見た牛舎の壁に張っていた看板を参考に、一頭の牛を縦九十センチ、横百二十センチのコンパネにペンキでかく方法にした。この看板が好評で、「今まで五〜六軒の農家に依頼されて作りました。中には共進会に入賞した自慢の牛の斑紋で制作したこともあって、その時は喜ばれました」と経子さんはうれしそうに話す。

看板を作るコツは「顔や目はもちろんですが、特に肢蹄の立体感、全体の遠近感を出すこと」という。「看板をかくことは趣味の一つですが、いろいろな趣味を通して、牛・酪農について語り合う機会が増えることはうれしいことです。酪農情勢が厳しいのは肌でひしひしと感じっていますが、焦らず、あきらめず、看板に負けない牛・牧場作りを進めていきたいね」と熱っぽく話す。

[この原稿は瀬棚町村上経子さんが「酪農新聞」に掲載されたものを複製したものです]



ひと足早い春

大津美保子

1. 福寿草が・・・

雪どけ水が・・・

雪がとけて土が・・・

それよりも、もっと早く

春を感じる事ができる

もしかしたら、それが

私の最高の喜びかもしれない。

それが便りの中の春

道外からの便り、そして便りの終わりに

あと少して、北海道も春になるよ

がんばれ。

家の回りは一メートルの積雪

まだ外は冬のたたずまい

花壇の土もみえない

だけど、私の心は

ひと足早い春。

2. 春の風が・・・

もうカレンダーの上では・・・

陽が長くて・・・

そんな事より、もっと早く

春を感じる事ができる

もしかしたら、北海道に住んでいる

者の特権かもしれない。

それが便りの中の春

耳で聞いた春

目の不自由なペンフレンドから

これは確かな春。

鶯のなれない鳴き声

まだスキーシーズンだというのに

ジャンパーはぬげないのに

だけど、私の耳は

ひと足早い春。

「一握の土塊(つちくれ)に、夢を託して」

常呂町 福山 小野寺 俊 幸

土は、微生物。つまり、「いのち」のかたまりだ。その「いのち」の営みの力をいただいて、私たちは、更なる「いのち」を、産み出す、育む。風土に、土に、活かされながら生きていく「農」の暮らし。いま、私たちは活かされているそのことに、もつと謙虚に向き合うことを忘れてはいないだろうか。

そしてその中で、私の「いのち」を活かしていかななくてはならないのではなからうか。

土地に暮らす。ご縁があつての大地、風土との出会い。どういふふうに私たちは向き合つてきたのか、また向き合おうとしているのか。私たちの大地、常呂の地域に生まれた、豊かな「農の風」が織

りなす暮らしをお話する中で考え
てみたい。

物語が始まった

『風がっこう』誕生*

常呂町福山地区。常呂町市街地から常呂川沿いに14キロほど内陸に入った純農村地区。二十一世帯八十九人が暮らす町内でいちばん小さな行政区でもある。

平成三年は春。児童数の減少により、地域住民の心のよりどころとなつていた町立福山小学校が、平成四年三月末で休校となること
が決定、七十有余年の歴史に終符を打つこととなつた。

福山小学校は、児童数十人にも満たない小さな学校だつた。しか

し、子供たちは、豊かな自然の中で、はつらつと学校生活を送つていた。先生たちは、子供たちを野山に連れ、自然という文字のない教科書から、いのちのこと、優しさということ、愛するということ、人として大切なことを、教え続けてきた。

平成四年六月、休校となつた町立福山小学校を舞台に、地域の人たち自らの手による「地域共育」の場、「風がっこう」が誕生した。

地域住民の高齢化、学生の町外流失、地域交流の職域化、人的交流の行政等への依存をはじめ、地域を取り囲む定番的ともいえる課題に対して、地域は、あまりにも「受け身」となっているケースが多々みられる。



小野寺 俊幸(おのでら としゆき)さん

JAとこ理事・風のがっこう代表
畑作・野菜経営

(お住まい：常呂郡常呂町福山354番地

TEL：0152-56-2450

FAX：0152-56-2420)

人がいきいき元気になる。基礎生活圏である地域が明るくならないければ、結果として住みよい町にはならないのではないだろうか。地域生活者が、地域に生きる自信、誇りを暮らしの中から取り戻していくことが大切なことではないだろうか。『風のがっこう』は、地域生活の中心であった校舎を、学校という制度化された「教育の場」から自発的意思に基づいた、開かれた「共育の場」として地域で再生していく試みだ。

区民の集い、講演会の他、大学との提携を図り地域住民が教壇に立ち、地域が育んできた農村文化を伝えるセミナーの開催。手作りカヌー、女性フォーラム、大学生を中心とした「学農」ファームイン、他府県の子供たちとの交流をはじめ、地域間・世代間交流が、農村の持つ心地よいリズムを大切にしながら、私にとって、家族にとつて、地域にとつての「学びの場」づくりが、多彩なプログラムとして展開されている。

『風のがっこう』は、休校となつた福山小学校に新しい「いのちの風」を吹き込んだ。『風のがっこう』は、人と人との平らかな心の関わりを中心に据え、評価と効率率にとられない地域の息づかいが伝わる豊かな「学びの場」として開かれていく。そして、関わる一人ひとりが主人公という、この「学びの場」を通して生まれるひとつひとつの体験が、地域生活者としての自らを高め、地域に暮らす自信を生み出す元気の素になっている。

一楽しいこと、気持ちのいいことは、足元にあります。地域の生活の中に価値を見出していくこと。また、価値を引き出していくことが大切です。

農村社会、地域の抱えている課題は山積している。しかし、そのことに背を向けるのではなく、しっかりと目を、心を開き、立ち向かっていきたい。

人々が、地域で生きようとするとき必要なことは、「学ぶ場」なの

▼「風のがっこう」—— 農を語る ——

風のがっこう 校長 小松 光一氏



であって「学校」ではないのだ。いま、「風のがつこう」が、問いかけているものは、地域に暮らす人々が、豊かな風土に育まれ、またよき出会いのご縁に紡がれ、いきいき元気に、「いのち輝く」地域の暮らしを築いていくための自立プログラムとしての「地域共育力」を、地域の中でどのように高めていくかということだ。

*胎動く動きだす

「農」の人々*

「風のがつこう」の心根が、静かに、しかし、熱く「農」にまつわる人々の心を揺り動かし、人が、地域が動きはじめた。そして、農協も、行政も。

平成六年四月、福山地区に、自給肥料供給センター「福山夢工房」が誕生した。全町のし尿を安全、無臭の液体肥料にする施設で能力は、全国一を誇る。

「福山夢工房」という名前のもとおり、建物は中世の館のようなしやれたつくりとなっており、また、福山地区を夢のある農村文化地区

に、との構想も生まれ、地域住民との積極的意見交換の中から施設周辺の公園化はもちろんのこと、バキューム車も外観からはそれとわからない農村景観にマッチした特別仕様車だ。

これらは「風のがつこう」が育んだ「自信」の延長上に生まれたものだと考えている。

農村に嫁いだ非農家出身の主婦の目には、農村の暮らしはどう映っているのか。農村のありかたを考える女性フォーラム「さくらフォーラム」も二年目を迎え、独自のミニミニ誌が誕生するなど活発な動きを始めている。

いま彼女たちは、女たちの飛行船「プロジェクト」に取り組んでいる。

また、常呂町最大の農業集落「岐阜」地区も動き始めた。平成七年三月「岐阜フォーラム95・春」を開催。更には、常呂川沿いに広がる「豊川」・「共立」の二地区は、今年開拓百年を迎えるにあたり、旧川沿地区として百年振りに両地

区合同でこの夏「心の風・大地に舞う」川沿フォーラム101」を開催、新たな二世紀を模索する。

「農」の人たちはたくましい。しつかりと大地に根をはるよう動き始めた。笑顔と開かれた心を持つて。いままでとは違う、未来を拓く温かく力強い「光」が感じられる。とにかく元気なのだ。

点が生まれ、点が繋がり、支え合う、広げる、深まる、というところが自然な形で展開している。これは、謙虚に、力まず、人が土地と風土に学んでいるから生まれてきたことにほかならない。風土に人が輝くとは、人と人が支え合い、人と人との間柄を地域のもつリズムの中で認め合い、受入れ、育んでいるからだろう。厳しい自然の中で暮らす「土」の人が培ってきた知恵のなせる技なのかもしれない。

人生五十年代から八十年代に向かういま、いかに人生を生きるのかが問われている時代であり、「豊かさとは」を問う意味においても、

これまでの価値観レベルをいまい度見つめなおしていかなくてはいけないのではないだろうか。今後、地域において展開される様々なプログラムについて、発想段階から大きく転換していかなくてはならないと考えている。



▲「福山夢工房」全景

*「らしさ」を、尊重

する暮らしづくり*

「いのち」と向き合う暮らし。それは、農村での暮らしを画一化していくことではなく、多様性を認

め、受入れ、育てていくこと。地域に暮らす一人ひとりのあり様、個性を大切にすることに他ならない。

言葉を換えて表現すれば、「何やらしさ」を暮らしの中で育てていくことではないだろうか。

例えば、「消費者」と「生活者」という揺るがない視点。これは不自然だ。ベーシックな部分、関わりが欠落している。地域生活者としてお互いが繋がっていかなくては、そこに豊かな「いのち」のやりとりは生まれてこない。消費者、生産者であるのではなく、共に時代を生きる地域生活者であるという、基本の関わりを見失ってはいけない。上下ではない、平らな関わり。そこに、人が、地域が輝くのみから。

リサイクルを考える。消費者は、生産者でもある。消費したものに新たな、更なる「いのち」を与える。リサイクルの「いのち」がぶくらむように押し出してやる生産者でもある。平らな関わりが、お

互いを認め合うことに繋がりに、「いのち」をリサイクルしていきこうという視点が豊かに生まれるし、お互いが生活のレベルで繋がっていきけると思う。

では、「らしさ」を何から学べばよいのだろうか。基本的には、「いのち」をどこに置くか、価値観の軸をどこに置くかが、問題なのだろうが、構えず、風土から、土から、暮らしの中で自然に学べばいいのではないか。例えば、麦をつくる、パンを、うどんを作る。乳をしぼる、バターやチーズを作る。野菜をつくる、ジューズを作る。ごくごく自然な営みだ。これは、農村の持つ「らしさ」のひとつだ。

しかし、農村の近代化の中で、このような営みは、マイナスの価値観としてとらえられ、都市と同じ「豊かさ」を享受しようという代償の中で、失われてきた心の部分だ。

「裕福」論と「幸福」論。いのち

を育む「らしさ」が失われている時代だ。「お金」本意から「心」本意への価値観、人生への視点の回帰。農村らしさ、何やらしさ。それを強要するのではなく、一人ひとりが輝くために「らしさ」を育んでいく。

前向きにとらえただ。もっと、自分の生き方に自信を持つてはならないか。「らしさ」を見つめることは、自立への一歩だ。

*「就農」と「修農」の

システムづくり*

土にまみれて働く。土と対話しながら暮らし。農業を継ぐ者は、年々減り続けいまや、単年度における全国農業就業者は、一大企業の就業者より少なくなっている。行く先がみえないからなのか。

私は、「農」の持つ素晴らしさを感ずることができない…；「農」の暮らし、文化をしつかり発信してこなかったことが要因のひとつだと思う。最近では、都会の若者が農業をしたいと田舎暮らしへの関心も高いようだが、私たちが、現

実を直視し、農業就業者の問題について考えなくてはいけない。

仮に六十歳で次の経営者といふことで一線を退けば、やはり、サラリーマンと同じように退職金として二、〇〇〇万円程度が年金やいろいろのものや組み合わせたら手に入らなければいけないと思う。そういうシステムをつくる必要がある。これは、「でなければならぬ」と強く考えている。

就農のことがよく語られるが、まず考えなければならぬことは修農のことだ。「農」を支えることは、地域を支えることだ。どのようにならぬ「農の心」を伝えていくか、安心の老後を支える「農の経済」をしつかり作ることだ。

修農者が「農のこころ」を伝える。農村文化を伝える「農の人」として地域に輝く、生涯現役の「農の場づくり」を確立していかなければならない。

また、就農についていえば、土地の私有制がやはり問題だ。現行制度の中で、土地を共有あるいは

集約管理していく。豊かな人生の基礎づくりとなる「農の経済」を支えるシステムが必要だ。長男だから嫌々農業を継ぐ必要はない。土地にしばられているからだ。土地の有効活用、卒業後を支える借地農のシステムも含め、「農」の精神を育む土地自体が抱える問題に大胆に目を向けてみる必要がある。

これからの農業は、農業にしっかりと向き合って人生を営む人が農業を営んでいくスタイルになるだろう。都会の人を受け入れるにしても、地域環境も含め、少し長い期間で人を育むシステムづくりが官民、地域一体の中で構築される必要がある。また、ただ単に後継者がほしいから、困っているから受け入れるではなく、ヒザを発給する、人を地域が選ぶくらいの毅然としたスタンスが必要だ。地域として応分の責任をもつということだ。

就農と修農、このシステムを一体のものとしてとらえ、生き甲斐を、誇りを持ち、安心して農業と

向き合える環境づくり、「農の経済」の確立が心の豊かな農村を作っていく大きな要因になると考えている。

* 農を拓く、地域農業 研究所のあり方 *

農村という考え方、意識の設定を見つめなおしてはいかかかと思う。北海道にあっても農村は、関わりとしては意外に閉じているのではないか。いわゆる村社会を構築している。農村は、地域の中にある。農村を地域の持つ個性として捉えてみる必要があるのではないかと思う。今後の農業を見つめる上でも、もう少し広い面の中で農村を考えたい。農業、農村を地域にかえそうと思う。

農村と地域が良きパートナーシップを築いていく上で、地域農業研究所のあり様が大きな課題になる。私は、「農」を拓く「核」となる地域農業研究所には、三つの特性を持たせたいと考えている。

①としては、「農」にまつわる懸



▲第2回常呂町生涯学習セミナー(平成6年10月6日)「第8講・福山料理実習」

(前列の一番右が筆者)

話会、サロンの性格。農業に関わる人、関心のある人の多くが自由に意見交換できる場づくり。

農業者、農業機関関係者はかりでなくいろいろな人たちが参画できる場を持つ。農」に対して心を寄せてもらう。農」を育む応援団として心を開く場だ。農」は地域の中に生きついでいるのだから。

②としては、①が鳥の目線だとしたらこれは、虫の目線だ。一人ひとりの農の現場をきめ細やかに耳を傾ける。土は、健康は、経営は、暮らしは。心と心を紡ぐサポート・ワークを徹底するシステムづくりが必要だ。特に、農業に関するトータルなマネージメント・システムを構築していかなければならないと思う。

また、「農」を支える、築く、パートナーとしての女性の経営への参画、暮らしへ寄せる女性たちの目線をしつかり受け止めることが大切だ。女性はいのちに一番近いところにいるのだから。

③としては、目的別の研究体制

を持つことだ。考えていかななくてはならないことをテーマごとに整理して取り組んでいく。ここで大切なのは、大規模な施設、ハードを持たないことだ。とかく箱物、形づくりが先行しがちだが大学、専門機関を上手く活用すべきだ。各テーマごとに年間いくつまで契約する。あるいは複数年。研究過程の報告を受け、地域の課題としてみんなで学んでいく。学びの場を暮らしの中に開いていく。知」のネットワークをしつかり持つべきだ。しかも長期戦略を持つて。土地に生きる私たちの経験と知恵に科学の目を加え持つこと、育んでいくことが大切だ。

この三つのパートが、正三角形の形になる。近づく。そして、この三つのパートを結び、機能的かつ有機的な双方の連携を生む、「農」のいのちを吹き込む、良き「コティネーター」を持つことが求められている。

たくましい「農」を築くためにもいま、地域を見つめる、地域に

活かされるネットワークのよい地域農業研究所が求められている。

* 一握の土塊(つちくれ)

に夢を託して*

私は、心の豊かな地域・農村を育むには、いくつかのキーワードがあると感じている。その一つとして、まず基本的に「自給自足」が大きなテーマではないかと考えている。いのちの塊(かたまり)である土。この一握の土塊が育む私たちの人生。ひとつの生命体である私たちが、自然の生態系のリズムの中で、生かされていく。地域に生きる、無数のいのちのやりとりの中で、共に生きる生命体として、どう自然と関わっていかななくてはならないか。共生」が私たちを育むとしたら、暮らしのあり様を見つめなおさざるを得ない。「自給自足」は、ひとつのキーワードだ。自分の暮らしを自らを立てる。大地、自然の力を借りて立てる。私は、自給自足で暮らしせとは言わない。その視点を暮らしの中に、「農」の中に、取り入れて

いく、実践していくそのことが、大切だと考えている。そのベースの上で「らしき」を培っていかばよいのではなからうか。

また、方向として考えていきたいことは、自給自足への視点、取り組みが、「地域」自給自足へ、更には、「町」全体が自給自足の宣言をしていくといった、豊かな広がりを目指したい。

このことは、「水」「川」「森」を始め、いのちを育む生態系の確立のため、ひとつの生命体としての私たちが、より積極的に暮らしのあり様を見つめなおすことにつながる。「共生への共感」から生まれる「暮らしの実践」は、きつと、地域、暮らしの見え方が、心のおき方が、変わってくるに違いない。そこに、いのちを育む豊かな「自然」との、新たな創造的なパートナーシップを地域に生み出していくことだろう。

二つめとしては、「農」が育まれてきた、地域の歴史、風土に謙虚に学ぶことだ。自分たちのいま、

これからを見据える上で、しっかりとした地域観、歴史観を持つことが必要だと感じている。自分たちが暮らすこの大地にさまざまな汗や、涙や、喜びを、時空を超えていま分かち合おうではないか。一つひとつの物語を、次の世代に誇りを持って、伝えようではないか。

過去と対話することは、心を、精神を育てていく。未来は、過去の先に見えるものではなく、過去の下に見えるくるものなのだ。

地域が持つ豊かな風土に育まれやがて「土」に帰っていく私たちの暮らし。より豊かにたくましく支えていく、新しい文化・風土を産み出すいきいきとした創造力と、多くの困難を乗り越え、生きる力が湧きでる「農の心」をこの大地に灯そうではないか。そのためには「夢」を持つ。時代へ繋ぐ夢でもいい。私、家族、地域、一人ひとりが、夢を持つ。語ろうではないか。そしてその夢を、実現しようではないか。「農」にはそれが出来るのだ。可能性に満ち溢れているのです。

第2回常呂町生涯学習セミナー
第10講・農業実習「ゴボウ掘り」

平成6年10月7日



いま、求められているのは、大きな勇気ではない。踏み出す一歩のためのちいさな勇気だ。そして開かれた心。「農」に、耳を傾けよ

う、心を寄せ合おう、だれもが初々しく「農」と出会った心に、いま一度立ち返ってみようではないか。

に生かされている、私たちの責務ではないだろうか。

一握の土塊から育まれる、「農の文化」の大河づくりを、この台地に立ち、この大地に感謝し、この豊かな大地方から発信していくことではないか。このことが、「農」

子供と花に囲まれて「農」に 生き甲斐を求めつづけたい

知内町 重内 大嶋 真砂子

(一)

私が、この知内町に嫁いでから、早くも二年の月日が流れ去ろうとしています。最近ようやく町の地理がわかりはじめ、この町に親しみを感じています。

私と旦那とは、結婚する一年ほど前に友人の紹介で知り合いました。知り合った当時、旦那は大学生だと聞かされていました。しかし、つきあっていくうちに旦那の職業が農業と知り、しまったという気がしました。でも長いつきあいの中で旦那の農業に対する考え方や、職業意識、夢などを聞かせら

れ、それに向かつて突進する姿に魅せられたのを覚えています。

私が最終的にこの人に決めた理由は、何といっても旦那の人柄です。私の旦那は負けず嫌いな性格で、少々怒りやすいところもありますが、こうと決めたら必ずやり遂げる頼りになる人です。また、その反面意外なほど独創的で自由な発想の持ち主です。これは「農業だから」「サラリーマンだから」といったことは関係なく、その人自身の魅力のような気がします。私は確かに農家に嫁にきました。しかし、決して農家に嫁いだわけ

ではありません。この今の旦那に嫁いだのです。私との気持ちがあつた人それが今の旦那であり、その人がたまたま農家であつたに過ぎないと思っています。ですから、農家に永久就職を決めたことに後悔はありません。

結婚して農業を身近に感じ、自分もその一員として取り組んでいるわけですが、最初は土地の広さや機械の多さ、そして、施設の広さにとても驚きました。今まで一度も農業を経験したことのない私にとって、これだけの土地を維持し、機械や施設を巧く使い分け

ている農家の方々には感心させられます。しかし、その分だけ農業の経験がない私には些細なことも難しく、いまだに戸惑うこともたくさんあります。

この二年間、ひと通り農業に係わってきましたが未だにわからないことも数多くあります。旦那や家族の助けを支援に、今はゆつくりと勉強していくつもりです。

(二)

ところで、我が家の経営は水稻(一四旭を中心に、畑作(四・五旭)施設園芸野菜(一、八〇〇坪)



大嶋 真砂子(おおしま まさこ)さん
(お住まい：上磯郡知内町字重内65)
写真は、平成7年2月25日・お嬢さんと一緒に。



▲最愛の「旦那様」とめでたく結ばれる

を切り回しています。中でも施設園芸野菜は、知内町特有の夏冷涼・冬温暖の気候を生かし、ニラとホウレンソウを中心に栽培しています。

ニラは、四月の播種から始まり七月に定植します。一度定植した苗は三年間収穫できます。七月から十一月までは成長期間でハウスのビニールは外していますが、十二月になるとビニールがけをします。ビニールは三重構造にし、無加温で真冬でも一定の温度を保ちます。収穫は一月末から五月まで行いますが、刈り取ったあとの調整に意外と手が掛かります。

私も勿論手伝うわけですが、素早く一定の量を上手に束ねられるようになるまで苦労しました。

ホウレンソウは、約二十五日〜三十日サイクルで、播種から収穫まで行います。真夏の高温時期の栽培は、品質低下防止用の遮光ネットを張ったり、水分管理にとても気を遣います。ホウレンソウは播種から収穫までの期間が短い上に、時期をずらして植えるので、夏場の最盛期には毎日ハウスの中で作業することになります。それでも、作業が負けてしまつのではないかとというほど忙しい毎日を送ります。

そんな知内のニラとホウレンソウは、身厚で柔らかく、健康食品として市場で高く評価されることは、私にとつてもとても嬉しいことです。

一方、水稲の作付は「ほのか224・ゆきひかり・きらら397」の三品種を行っています。水稲は野菜と違い、約一年間の長い月日をかけて収穫するわけですから、収穫の喜びも一入です。

しかし、平成五年は極端な冷夏にみまわれ、本当に大変な年でした。戦後最大の大凶作とまでいわれ、町内でも米を求める人で長い列が出来、平成の米騒動とまでいわれました。我が家も例に漏れることなく大きな打撃を受け、米の収穫については殆ど皆無に等しかつたのを覚えています。

そんな中、政府は緊急に米の一部市場開放の措置をとり、農家にとつては不安の種の尽きない情勢です。このように、私が嫁いでからの二年間は農家にとつても消費者にとつても忘れることのできない期間でした。

(三)

さて、日頃このような難しい問題を抱え、忙しい日々を送っている私達ですからストレスもたまりません。そのストレス解消と勉強を兼ねた交流の場として、私達夫婦が活動しているサークル「夢クラブ」についてご紹介します。

『夢クラブ』とは、平成五年に結成した農家の新婚さんを対象としたサークルです。主に農村のありかたの勉強会や様々な交流会を通じたネットワーク作りを目的としています。

農業改良普及センターや、町、農協といった関係機関の助言をもとに「明日の明るい農村づくり」を目指し、作物の現地研修や道南農試への視察を行ってきました。また、日頃抱えている問題の改善策やいろいろな意見交換なども行っています。

視察は、自分たちも手掛けている水稲とハウスを中心に、町内における先輩農家を回りました。具体的な肥料の量や使い方、作付方法など私たちが普段やってみてわ

からないことが多いので、とても良い経験になりました。私自身、わからないことだらけなので、毎回必ず一つくらいは何かを吸収出来るように心掛けて楽しく参加しています。

過去何年かは、不作が続き農家にはダメージの大きかった年もありましたが、天候に左右されやすい職業だけに天気が気になるようになりました。この『夢クラブ』の交流会や勉強会が何かの形で農家のプラスになればと期待しています。

現在クラブ員は六カアップですが、これから結婚する方々に活動内容やクラブの良さをもっと理解してもらい、どんどん輪を広げていければと思っています。

また、『夢クラブ』としてやってみたいことがあります。町内に住む若い異業種の方々と交流です。私も少し前までは一消費者でしたが、作物がどのようにして出来るのかなど全くといっていいほど知りませんでした。ですから、消費者との交流を通して作物や農業のことをもっと知ってもらい、その

上で買ってもらいたいと思います。また生産者も、消費者ニーズを再確認してこれからの経営に生かせる形での交流会を行えばと、旦那と話しています。

実は、昨年十一月に我が家にも初めての子供が生まれ、ただいま子育てに奮闘中の毎日を送っています。一日一日大きくなっていく我が子の成長をみて、自分の幼い頃を思い出したりしています。そして今、自分が母親の立場になって子育てを経験してみると、子育ての忙しさや難しさが身に沁みます。ですから、私をここまで育ててくれた両親に対し今まで以上に感謝の気持ちが高まっています。

◀目に入れても痛くないほど可愛いお子さんの誕生



そして、一人の子供を育てていく責任の重さや充実感をずしりと感じ、改めてこの子の為にも頑張るって行かねばならないという気持ちで一杯です。

昔と違って最近は出生率がとても低くなっています。これから先、子供にとっては同年代の遊び相手が減っていく、子供が安心して伸び伸び遊べる遊戯場も減ってくるのではないかと心配もありません。

◀ご夫婦でくつろぎのひとときも



北海道の自然もどんどん都市化が進んで変わってきています。幸い知内町は安心して遊べる場所がまだ残っていますが、自然とのふれあいを大切にしながら子育てをしていきたいと思っています。その、ふれあいの中で子供たちがいろいろなことを学び、知識や経験を得てほしいと思っています。その為にも、農業をもっと楽しめる環境と、気持ちの余裕が欲しいと思っています。

(四)

これからは農家と子育てを両立させて生活していくことになりませんが、両方とも旦那と協力し合い、旦那の両親に助けってもらいながら頑張っていきたいと思っています。

先日、何気なく見たテレビで、「過疎を楽しむ」という題の番組がありました。内容は、都会の子供たちが小さな村で自給自足の生活を二週間体験するというものでした。都会で塾通いの子供たちが農村での生活を楽しみ、いろいろな知識を得ていました。その子供たちの表情はどれも実に生き生きし



▲『夢クラブ』ヤングミセス現地研修



▲『夢クラブ』勉強会

たものでした。これを見て農村も悪くはない、私もここでいろいろなことを学びつつ子育てをしていこうという勇氣と意欲が湧きました。

番組の最後に地元住民のインタビューで、「昔はよかった、今の農業は利益追求の手段だけだ、なぜ変わってしまったのか」と、嘆いていました。これには私も心が痛みます。確かに生活が掛かっているの、一定以上の収入が必要ではありますが、そのみの追求というのも寂しいものを感じます。

3Kと言われながらも農業を続けていく以上、そういったマイナスイメージの強調ではなく、むしろ農業だからこそその楽しみや豊かさを求めていきたいと思っています。その点で、今の農業は金銭の富を得ていますが、心の富は失ってきているような気がします。

私は、せっかく農家に嫁いだのだから自給自足でも、子供と花に囲まれ、生き甲斐を持った人生を歩みたいと思っています。それが本来の心豊かな農業の姿ではないのかと私は感じています。



▲『夢クラブ』・町長と語る夕べ

ハーブを導入して心豊かな

農家生活を持続する

東川町 西七号 中田 正俊

北海道の中央に位置する上川盆地で、旭川市から東へ約一四kmの東川町で農業を営んでいる私は、開拓のクワを入れた祖父そして父が引き継ぎ、その農地を三代目の私が引き継いで三〇年余りになろうとしています。旭川農高を卒業して父や祖父の農業を手伝っていた頃は、特別な希望も意欲もありませんでした。農村に生まれ育った五人兄弟の長男だったということで、青年団に4Hクラブに地域のサークルあるいは小グループに参加して、活動は進んで楽しく、農業はイヤイヤという具合で数年がアツという間に過ぎてしまいました。

その間には、農村の近代化、機

械化、大型化等と一〇年どころか五年一昔で進んできたような気がします。そのような時代に農業にたずさわっていたので、辛くて厭きるといふ農業ではなかつたと思います。それよりも、私もそうであつたが自転車とカリヤカーの時代からバイク、乗用車、トラックがどんどん入り、農村家庭の電化やガス化が急速に進み、視察研修旅行は汽車からバス、自家用車、道外へは飛行機で行くなど、私の農業青年時代はとて華やかで楽しい時期であつたと思います。

そんな農村生活をおくっている時代で、年に一回の稲作も道内としては恵まれた(東川の水田)地域で優良米産地とラumpfつけされ

ていたこともあり、上位等級米を続けて出荷できる水田経営をつづけてこれ、大冷害も大凶作も経験することなく今日まで来たような気がします。これも全て先人の苦勞と、先祖の入植したこの場所が他の地域より、他の人達より恵まれていたのだとつくづく感謝しております。

そんなこんだで、昭和五二年に父から経営を受け継ぎ、妻と二人で自分なりの農業を営むことになりましたが、その頃から農業情勢が変つて、米余りによる減反とカ、農産物の一部自由化、価格の下落など、周りが慌ただしくなつて、私もその頃より、転作・減反政策に同調すべく水稻以外の他品

中田 正俊 (なかた まさとし) さん

経営概要：面積10.1ha(水田8.68ha 転作畑1.42ha
ハウス100坪×5棟、育苗ハウス50坪×5棟)

水稻のうち6.6haは特別栽培米きさら397。
ハウス栽培品目はメロン、ホウレンソウ、モロヘイヤ、フレッシュハーブetc。露地栽培は、スイカ、南瓜、スイートコーン、ハーブ各種etc。
生産額概算：1億6000万円。

ご家族：奥様(秀子さん)とご両親
お住まい：上川郡東川町西7号北45番地。

写真は奥様のアイデアから生まれたメッセージ入りのスイカを抱いた筆者。



目を取り入れて農業経営をするこ
とになりました。

一般的には転作田に麦、ヒート、
豆類など政府が奨励する品目を作
付してみました。一番困ったこ
とは限られた転作田にこれらの畑
作物を植え続けると連作障害が起
きることでした。作付品目を毎年
変えるとも農機具が間に合わないこ
かの問題が出来、これも悩みの種
です。畑作道具が一切無いに等し
い状態でしたので、四五%も休耕
した時は農協の機械銀行からの支
援で切り抜けましたが、これが結
構馬鹿にならない経費でして所得
率がかなり落ちます。

その頃は、色々な品目に手を出
して作付しました。豆類のときは
小豆ではなく白小豆を導入し、交



▲ドライフラワーをつくる
奥様の秀子さん

付金大豆ではなく黒大豆をマルチ
栽培したり、野菜もハウス物とト
ンネル露地物を年中通して、スイ
カ、メロン、南瓜などをやってみ
ました。その他、葉菜類も取り組
んでとにかく連作障害を避けるた
め、色々な品目を転作田に植えま
したが、これを毎年つづけると労
力、資材、管理機具が伴わない状
態になりムダやロスが多くて、苦
勞のわりに所得に結びつかない日
々が数十年経ち、今日に至ってお
ります。

これは私だけじゃなく、農家の
皆さん同じだと思います。

そんな中、私は昭和五六年頃よ
り、当時話題になりはじめたハー
ブを少々つづ楽しみながらやり始
めていたのです。今振り返るに行

政指導機関は、やはり必要かつ頼
もしいものだと思います。当時の
役場農林課のM係長が、「新規特
定品目の奨励」等といつて「転作
田に作付しましょう」とハーブの
苗を数種類取り寄せて、私共有志
にすすめてくれました。それが、今
日までハーブ作りを続けることに
より、私の「稲作プラス野菜、そし
てハーブ」という農業体型になり
ました。



▶ハーブ見本園にて中田さん
ご夫婦

主体である米も、特別栽培米制
度ができた時に農協の営農課長で
あるM氏に、「これからは化学肥
料だけで多収をねらうのではなく
土に優しく、消費者に安心して喜
んで食べてもらえる『有機減農薬
栽培米(特裁米)』を作ってみたら
……」とわれ、手掛けはじめて七年
目になり、今では当町でいち早く
取り入れたヘリコプター防除を一
切行わず、除草剤一回のみという
栽培方法による特別栽培米を消費
者に直接届け喜んでいただいてお
ります。

それから特裁米、有機野菜とハ
ーブの関わりですが、ハーブの中
には病虫害忌避の働きをするもの
があることを知り、その中でウン
カ、カメ虫などに対して忌避作用
をするハーブ(カモミール、チャ
イブなど)もあり、それらを水田
の畦に植えることにより害虫が寄
りつきづらい効果を利用したり、
雑草が繁った畦でなくハーブの花
が咲く畦道ということで訪ねてこ
られる皆さんに喜ばれています。
一石二鳥、いや一石三鳥です。

農業に携わって現在までの三〇

年を大まかに記述しましたが、私が言えることは、年に一回しか穫れない農業、自然相手の農業、農業者を取り巻く情勢(農政、行政・諸団体、商社・業者など)を無視せず、さからわず、自分のペースでそれらを合わせ、栽培作物と一緒にすすむことにより、一年が苦でなく楽しく終われる農業をやりつつけることだと思います。

結論めいたことを先に書きまし



▶ 作況調査をする中田さん

だが、私は時の流れに逆らって何か行動を起こすと、身体がつかいし夜も寝ないで頑張らなくちゃいけない結果になりがちだと思いません。無理な計画を立てず自分のペースに合った計画だと、そんな心配はない。しかし、先を読み取る行動は必要かと思えます。一日先、一週間いや一年先、十年先はどうなるかなと思う心は絶対必要だと、私は思い、やってきました。例えば、妻と父母の四人で、五のものが七から一〇まで拡大できても後継者がいない私共には、一〇年後、一〇年後には縮小もしくは維持するための設備が必要となります。現状のままでは体力が縮かなくなることから、老後に備えた環境、貯えも必要でしょう。サラリーマンに定年があるように、私達夫婦にも農業の定年がやってきました。その時に、六〇kgの米袋を扱うのはとても辛い。一〇ha耕すのも辛い。ハウス管理も大変です。いまから自然管理システムを少しずつ取り入れるとか、乾燥調整作業も機械や道具を上手に取り入れて使う方法を、無理せず少しずつ先を

読んで取り入れていくことは必要で、それらを自分の経営に合った中で、ある時は先行投資の部分もあるうかと思うが、それによって一人て将来に向かつて楽しみながら農業をつづけられることが一番です。

◀ 害虫忌避のために植えられたハーブ



今までもそうしてきたつもりですが、無駄な買い物(投資)は出来るだけ避けるべきで、共同で使える(買える)道具・機械は共同で、新品でなくともよい物もある。

作業能力以上(馬力数等)の機械・道具は求めない。かといって辛抱する意味から人力でやるのも辛いこと。進んで機械・道具に明るくなるうと努めてきた。それらを手を使うことで、作業がとても楽しいことにつながるし身体も楽である。

研修、視察、講習会などには進んで参加すること。自分たちの近所以外で、世の中に数多のすべれものがありそれらを百聞するより一見することによって、自分の営農計画にプラスとなり楽しみが増してくる。情報が乏しいと力遅れがちな自営業から脱皮することが必要に思う。現代社会は、いかなる産業であろうと情報メディアに遅れをとらないようにすべきです。雑誌、機関紙、マスコミ情報などに遠去かつてはダメで進んで目を向けるべきだと思う。

私は旅行が好きで、乗物で移動中でも全て自分の農業経営に結びつけて風景を見ている。「変わった建て方の格納庫だな」とか「納屋だな」とか、建物の配置などとても気になり、農機具の上げ下げの

農業を楽しむ中田さんの農業経営

JAひがしかわ営農課長 村瀬慎治

「心豊かな農家生活の持続的な展開」を目指す東川農業の中にあつて、中田さんの農業は正に心豊かな農家生活を地で行っていると言える。特に、昭和56年にハーブを導入してからは楽しめる農家生活を意識した取り組みがなされているようだ。

樹齢約90年の赤松をシンボルツリーとした宅地周りの田園風景は美しく、町道から住宅までの20m程の木戸道の両側には、ハーブ（チャイブ）が植えられ、目を見張る紫の花が迎えてくれる。

住宅の横には、東川町の文化財にも指定されている漆喰の倉が昔の農家屋敷を連想させてくれる。住宅周辺にはゴミひとつない。庭の片隅には手作りの数個の灰皿が据えられ、常にきれいにしている心がけを知ることができる。

農舎や車庫の天井や壁にはドライハーブが沢山下げられている。自家菜園畑の一角には30坪程のハーブ見本圃があり、数十種のハーブが植えられている。私達が中田さん宅を訪れると、奥さんの秀子さんが自家製のハーブティーを煎れてくれる。

ハーブの栽培や花を楽しみ、ドライフラワーやリース作りを楽しみ、お茶やお風呂にして楽しみ、苗やフレッシュハーブとして販売をして利益をあげる。さらには水田畔に植栽し害虫の忌避と景観作りに役立っている。平成元年からは有機減農薬栽培の特別栽培米づくりを始め消費者との交流をつづけている。多くの消費者が中田さん宅を訪れて、中田さんの農家生活や考え方に接し、多くの消費者が感動し、農家や農村、農業や食料についての認識を高めていると共によき理解者、支援者となってきている。

中田さん自身も、消費者との交流の中でさらに農家生活の価値観を知り、それを高めていっている。そのことにより農業に自信と誇りを感じ、楽しく農業を実践している。

中田さんの口からは「農業は厳しい、大変だ」などの、悲観的な言葉を聞いたことがない。常に新しい発想と行動のなかで農業を実践している。秀子さんのアイデアで、スイカにメッセージを彫り込み宅配（ギフトなど）してみたり、フレッシュハーブとしてチャイブやパースル、ビルなどを東京に出荷したり（現在は4人の仲間と協力し実践している）新しい品目も積極的に導入している（ズッキーニ、トレビス、チマサンチエetc）。春、秋の2回開催している「くらし楽しくフェスティバル」では、毎回訪れる2万人以上の人達に対しハーブの苗やドライの販売をしながら農村文化を提供し、好評を博している。

少しの暇をつくりだし、道内、国内、外国を見聞して歩き、新しい発想やアイデアを作り出す情報源としているようだ。常に前を向いた行動力と決断の速さには敬服する。

中田さんは「経済活動をしていく場合は、どの業種も常に努力していくことが必要であり、その部分では農業も同じだ。しかし、それだけでは農業を行う価値は無く、農業だから、農村だから出来るものをやっつけていかなければ…。

せつかく農業をやり、農村に住んでいるのだから…」と、庭に置いたテーブルに座り、ハーブティーを楽しみながら話してくれた。こんな生活は、都会の金持ちにも出来ないものであり、ここに価値観を見つけて農業振興していくことが大切なんだということをしみじみ感じた。

方法、移動中のスタイルなども興味を持って見ている。これらほども楽しいことである。こんな具合で、何でも全て自分に結びつけ置き換えてみると旅行に行っても、視察に行っても非常に楽しいものです。

話を戻りますが、米作一本の私ですが、転作が始まってから色々な物を栽培してきましたが、失敗したものの、成功したものの全てが勉強になり肥となつて、今、現在やつていくことが出来ると思ひ、お天道様に逆らわず自然と一体となつて、世の中の状態を見極めながら無理なく楽しく農業を続けたいと、今のこの時も思ひ、考えています。



▲特別栽培米の圃場にて

上村 美智子（うえむら みちこ）さん

1943年静岡県に生まれる。1965年渡道、結婚（夫・旭川市役所勤務）。1971年秋、現在地に新規就農、メロン栽培。1978年全国の農村女性ネットワークを発足。1981年「毎日農業記録賞」受賞。1984年自伝「花びらのつづく道」自費出版。1986年農村女性文集「あぜ道」編集発行。1989年農村女性文集「ともしび」編集発行。1994年「ま・な・び・す・と大賞」を受賞。現在、メロン20アール、サヤインゲン5アール、燕麦（緑肥すき込み）2ヘクタールを経営。家族は、夫と長男（19歳）およびファームスティの小学生2人。お住まい：旭川市西神楽16号3-102 TEL：0166-75-3505



新規就農二十四年目

「花のある暮らし」を夢みて

旭川市 西神楽 上村 美智子

裸一貫・脱サラ新規就農

新規就農を志して旭川近郊に農地を取得し、親娘三人で移り住んでもう二十四年目を迎える。結婚して六十年のサラリーマン生活から農業人生に転じたが、夫の描く青写真、生涯設計に近づくのはいつだろうと私は一心農作業に励んだ。

走り出したのだから止まらない。振り返ることのできない途方もない人生を選び、私は「仕事」という前しか考える余裕がないほど没頭した。でも、親の職業選択のために子供を犠牲にしたくないと母として私は念じた。

公務員住宅に住んで菜園も手が

けたことがない私が、通年雇用の皆と畑に出て最初に教わったのは作業ゴム手袋のはめ方だった。出番さんに肥料袋の扱いや開け方など教わり、しつかり昼寝をする必要性も教わった。だが実際には一緒に横になっても眠れず、二人三人と目覚めるのを待つて起きる気の休まらない休息だった。

三haのメロンを主とした野菜栽培は脇目を振ることを許さず、定植や整枝管理期は睡眠不足の極致であった。ある日昼食の支度に家に入ったが一人になれた安堵感もあつて脱力、「ハッ」と気づくと夫と皆が帰ってきた。ほんの二丁

三分と目を閉じた私は、地下タビも脱がず上りかまちに身を投げ空白の中にいた。

収穫期は夕食にはくれるほど多忙で、市場に向かつて百歩も走るともう助手席で眠りこける有り様で、慣れない北海道農業に私は疲労困憊の連日だった。

本州から嫁いで、雪国の気候風土にもまだ順応できない私が、給料取りの妻から一転して農婦になつて、気はあるのだが体がついて来なくて気管支炎やギックリ腰を度々起こした。

充分な作業姿勢ができない私を見て「そんなことをしていたらいつか体を壊す…私達がするからあつちで休んで下さい」と言ってくれたAさん。出番さんに言われても

腰を休めない。私は、夫の一言を待った。

とにかく過酷な毎日だった。覚悟はしていたけど新規就農の実態を知らない者の覚悟は儚いもの、私は案の定、体を壊して入退院をくり返し、仕事に就けない身となり人間には限度があると病床で反省をし回復を待った。

農業に夢をかけた夫は私より先に起き仕事一途、そしていつも、相棒仕事で私を必要とするのだった。農業面の困難はともあれ、子



▲「花のある暮らし」を夢みて…
メロンファーム・うえむら

供の教育に共通意識が得られなかつたりした時、私は就農そのものに恐みさえ覚え農業生活に絶望した。そんな時に毎日通ってくれる出面さんが「この土が、いつかきつと上村さんをラフにしてくれるわ」と言った。土が幸せにしてくれるというMさんの言葉は新米農婦に意味を深めて伝わり新鮮に受けた。重みのある先輩農婦の諭しがそれからの私の日々を励ましとなつてついて来た。

阪神大震災で被災の

小学6年生二人を預かる

夫は農家の二男だった。だが公務員を自主退職しての就農で新規参入農業に転身するにあたり要である経済基盤がなかった。初年度の多額な投資、資金借金返済のためにも収入を伸ばさねばならず、仕事のサイクルは猛烈で止まることを忘れた籠の「コマネズミ」のように働いた。冬の日も連日軟白ミツバの生産出荷、床に就くのは零時すぎが常だった。

脱サラ農業を始めた昭和四十年代は農業が衰退し、新規就農は時代を逆行した生き方だったと思つた。その選択には自己資金がない身での起農（新たに農業を始める）は無茶、とつてい賛成でざる転職ではなかった。でも私は物申す勇氣もなく黙つて従つた。

親から受け継ぐものがない新規参入農家は一年一年が厳しい関門で並な道ではない。旭川の隣町「JAたかす」は数年前から新

規就農後三年間で一千万円を据え置き三年・償還十二年で貸し出すという。帯広でも担い手育成を目的に都会に住む新規就農希望者に通信教育を施し、就農時は市が農地斡旋などして援助するという。新卒者やUターンも減少、ますます農業従事者は高齢となり離農も進む時下、意欲をもつて外から来る者に手段を与え導く対応が求められていると思つた。

何の後ろ盾もなく私達夫婦は自分の足で農地を捜し歩き、営農準備金もないまま農家の一代目となつて、知り合いや保証人もなく村に入り何をするにも当然ながら壁ばかりだった。耕地、家屋、農具に施設と一切を背に「スタートしたので豊かさとは中々縁がなかった。反面、無一物で就農したからこそ会得したことも多く、ゆえに今の日々があると自負もする。

振り返れば「農業をやりたい」

の一念で突き進んだ夫は本望であ
ろう。零細な農家だけと売るため

に育てたバンジーを施設に寄付、
匿名で申し出たのに「農家ならき



▲東京での授賞式に全国（北海道～九州）から集まった仲間たち。
（中央は選考委員のひとり、見城美枝子氏。筆者は右から4人目）。

つと車に名前があるヨ」と知的障害を持つ皆さんが拍手で迎えてくれたつけ。メロンの規格外品がドツサリ出て泣きたい時に、夫が家庭に恵まれない子らを思い出してプレゼントした。長年、学校花壇の草花を栽培したが、何より思い出すのは新規就農の初年度に実生したレンゲツツジが成育して花を付け始め、小学校や中学校、保育園などに百本ずつ寄贈できたことである。二十二年経った今それぞれ公共施設で丹精され、私達夫婦の初志と夢を咲かせている。

精いっぱい農業人生でも自分の生産活動を通し社会に関わる気持ちが生まれ、有形無形の行為や生き方が現れることは我ら夫婦の歴史の一部でもある。今はあの阪神大震災で被害を受けた神戸の子供二人を受け入れて束の間の親代わりをしている。小学六年生の二人の女の子はホームシックもなく元気に北国の暮らしを楽しんでいる。

「義務教育の一貫として、どの子も一度は、農山村留学をさせた」と、以前から私は唱えていた。

農家の子も家の仕事に関心を示さない現代だけど、都会の子にも体験の中から農業は大切なもの、農業は食べ物を作ることを超え風土を守るという価値があることを身近なところから伝えたいと思つている。

縁あって家族になつた一人の女の子に私は早速青菜の種を渡して一緒に蒔いた。最初三三三を見て気持ち悪がつていた子も生物の役割を話すとき愛しそくに土にもどしていた。恐怖の地震ゆえに、この子たちの未来に北海道でファームステイしたことがきつと彩色されると思つ。

春だっきゃ
上村美智子

姉っっちゃ
川原の土手さ バックおがてらよ
土のかまりっこ するよ

姉っっちゃ
柳のホンボコ ふぐらんできたよ
せきの音っこ 聞こえるっきゃ
なしてこたらにおもしろんだべな

姉っっちゃ
春だっきゃ
春だっきゃ
春が来てらんだっきゃ



▲体験文が「ま・な・び・す・と大賞」を受け、受賞者を代表して挨拶する筆者。

全国の農婦と「こころの回覧 ノート」が十八年目

裸一貫の就農で人知れぬ不安を抱く連夜だったけど、そうした心のおき所として私はいつも活字を求めペンを握っていた。ひそやかな楽しみは新聞に投稿して図書券などをもろうことで、理不尽ばかりの現実を振り払い小さな幸せを見出しは文章にしていた。そして活字になると読者から感想や文通申込みが舞い込み友達が大々

と増えていった。
農村生活に入り一番空虚に思うことは話し合う人が少ない事で、同一価値観で共鳴し合ったり意見交換する仲間がない事だった。家業に縛られ思うように外出ができないという現実も加担していたが、私は友達に飢えていた。様々な思いを「諦める」という成りゆきで伴走して来た私は、このまま

歳をとるの
はイヤだ、
もつと自分
というものが欲しいと
痛切に思う
ようになった。
そして
暗中手さく
り、行き着
いたのが各
地の農婦を
輪にしたネ
ットワーク
を作ること
だった。
昭和五十
三年一月、
私は全国に
散在してい
る農村の仲
間に呼びか
け「ともし
び会」を発
足した。二
年後、緑黄
色野菜「パ
イラム」を



自分史『花びらのつづく道』と、これまでに編集されてきた農村女性文集の数々。



▶メロンの選果作業・出荷準備に余念がない筆者

媒体としたグループも生まれ、皆でペンを持ち合い回覧ノートの交流を転回して親睦を図った。日頃実践していることや考え、提言、一冊のノートはよろず相談も乗せて東西南北リレーされた。友を求めているのは私だけではなかった。回覧ノートの会員は四十二名、営農形態は専業・兼業・パートと

それぞれ異なるが、よりよい農村生活を望み、自分を一歩でも向上させ生き生き暮らしたいと願っている。人は信念と共通意識の中での切磋琢磨で成長するのではないだろうか。出来なかつた…のではなくやらなかつたことに気づき、不満を排除し、「誰もが太陽でありう

る(島崎藤村)」ことに目覚め、人間は拳を握つたまま笑えないから忘れる努力も必要と…そして心がスツキリすると次は何と色々な事が浮かんで来よう。農村に限らず人間の喜び悲しみ、怒りなどの感情はすべて周囲の人との関わりの中から生ずるように思う。つい幸福も不幸も自分の描いたように言つてしまいがちだが、仲間とのつながりの中で悦びや悩みを共有し合うことによつてコミュニケーションシヨンが生まれ、悲しさを悔しさの涙より人のために流れる涙が真実と気づいていく。身内や近隣には話せない事柄も、一本のペンで培つた友情が心情を吐かせ、ノートが一巡する頃は、不足は不足を呼んで、悦びは悦びを運ぶ原理を悟る境地となつていくのだつた。農家のお母さん達と心の向くままペンをとり、文集を作つたり自主研修の集いをしたり、農業に励

んでいる仲間たちの活動も十八年目を迎えた。農婦が物を書き合つと、とかくグチや悩みの羅列と思われもするが、世話人の私の生活信条が波及して仲間たちは前向きにペンを運んでいる。知識を分け合い知恵を伝え合い、皆で書き続けた証のノートも百数十冊を数えた。これからも仲間たちとしっかりした農業哲学を持つて心を結び合つて行きたいと思う。私は夫の脱サラ農業に従つて農村に入つて来た当時、友と呼べる人がいなかった。若妻会に入る余裕もなく追われる四季の中で、いつか心豊かに暮らせる時代を持ちたいと思つた。花に囲まれ友とたおやかに語り合う日、「仕事だけの人生では終わりがたくない」と執念にも似た思いを胸に重ねていたものだった。就農時に連れて来た長女は親の苦勞を見て農家には嫁がないと言つて看護婦になつたが、今は農業青年と家庭を持つてもうすぐ二人目の出産を迎える。農村は人が人らしく暮らせる最たる環境だと思ふ。いかに生きる

か、既存の枠にとらわれない伸びやかな発想で自分らしく生きたいもの。仕事一途の脱サラ農民だったが、後年は自分に向き合う時間を大切に、心にも花を咲かせつつ農村だからこそ味わえる生き方を探って行きたいと思う。

平成7年1月19日〜20日、札幌で開かれた農村女性フェスティバルで(中央が筆者)。



▶花をいっぱい育て、愛でる生活を！

土とペンで結ばれた農婦のネットワーク

回覧ノートの仲間たち

上村美智子さんのことを知ったのは平成六年六月一八日付、北海道新聞「ひと94」記事からでした。そこには、「学び心」旺盛でチャレンジ精神に富む人を讃える賞、「ま・な・び・す」と大賞」に、全国三九八〇編の応募の中から最高賞に選ばれたと紹介がされておりました。それ以来、一度はお話を聞かせてもらいたい、出来れば本誌に執筆の無心もしたいもの、ただし、農繁期は極力避けてと思いつづけてきました。

この度、「こころ豊かに「農」と親しむ」を特集するにあたりその念願が叶いました。メロンの苗立て作業や大震災の被災児童のファーム・ステイのお世話などの多忙を極めておられる最中に、電話や手紙でのやりとりに応じていただきました。

原稿と合わせて昨年発行された「ともしび16年号・(愛称)北キツネ」ノートA、B二冊もお貸し戴きました。この回覧ノートは「ともしび」の誕生日にあたる平成六年二月一日、上村さんの手元から南と北、二方向のそれぞれの仲間へ向けて出発し二巡回を終わり上村さんの手元に戻ってきました。

回覧ノートは、毎年一月一日に発行され、その時々のテーマについて腹藏無く意見を出し合っていました。昨年(一九九四年)は、「国際家族年」であったのでテーマを、「夫婦」「親子」と決め、そのあり方などについて「北キツネ号」でお互いがペンをとり合い、意見交換が行われました。二冊ともB5版のノートの余白を惜しむかのようにつつしりそれぞれ「こころ」が書き込まれています。否、それどころかノートは昔子供だつ

た時、驚嘆すら覚えたあの「飛び出す絵本」さながらに、写真あり、スケッチあり新聞・雑誌の切り抜きありといった楽しいものです。そして、それにも増して中に書かれている全国各地の農村女性の逞しいバイタリティーには圧倒されそうです。

読者の皆様は実物はおるか、その全てをおつなぎできないのはいささか残念ですが、上村さんのご内諾を得ましたので、その中のほんの一部だけを転載させていただきます。(編集部)

〈回覧ノート〉 『ともしび16年号・北キツネ』より

・熊本県 Oさん(52歳) 94年2月4日

暦の上では立春を迎えました。北国は何年ぶりかの大雪と聞きま
す。雪のない私達の所では想像もつかない大変さでしょう。今年は
一度だけ雪が降りましたが全く積つたことはありません。我が家の
庭のパンジー等はもう春ですヨとはかり咲き誇っています。チュー
リップ、ヒヤシンスもやがてつぼみが見えそうです。

いつも仲間のために楽しいノート感謝ですヨありがとう。今年は
「ともしび誕生100日」が「一番」に着いて良い年になりそうながしま
す。どうやら娘もおめでたのようです。一週間もすればはつきりす
ることでしょう。いよいよ、先輩はあちゃんの仲間入りになりそう
で嬉しいですね。

今春は、私達にもう一つ嬉しいことがありました。農業コンワー
ルで夫が地域功労賞を受賞、この10日に「ニューオオタニ」で同伴で表
彰式があり出席の予定です。下さい、と言つて戴ける賞でもありま
せんし、喜んで嬉しく戴きに参列します。

・大分県 Aさん(58歳) 94年2月9日

立春を過ぎたというのにまだまだ寒い日が続いています。別府の
方は久しぶりに雪が降つたそうです。国東の方はチラホラと、それ
でも子供たちは大喜びをしています。テレビで北国の大雪を見ると
「いいなあーあんな所で遊びたい」と言っています。

我が家の座敷では「お雛さま」を飾つて一足先に春です。昨年は
ごたごたしていましたので飾れませんでした。今年は新しいお座
敷で一段ときれいに見えます。

今、主人と二人で庭造りをしています。庭といつても私が今まで
育てた木や花がたくさんありますので、それを植えています。あの木
も、この木も。思い出がいっぱいあります。貧乏のどん底の時も、
花を咲かせ、きれいな実をいっぱいつけてくれた木々です。庭に植
えるとまた一段と大きく立派な木に見えます。植えおわつたら写真
を貼らせていただきます。見てくださいね。

・岐阜県 Yさん(41歳) 94年3月8日

ともしび16年、すーいノ頭が下がります。今朝早く東京のいと
こから電話があつた。「米を買いに行つたら列になつて並んでいた
の、国内米ほしいんだけとない。」とのこと。こんな事態がやっ
て来るつて、本当に明日がわからない。今まで、日本が平和すぎた
んだなあーつて、お金をごんなに積んでも、大切なものは何だろつ
と、改めて考えさせられます。

・愛媛県 Hさん(39歳) 94年3月16日

今、野菜作りに凝っています。ほんのネコの額ほどの畑ですが、
種をまいたり苗を植えると、毎日畑を見に行くのが楽しみになりま
す。土づくりが今ひとつなので満足なものは一つも出来ないです
が。人が訪ねてきた時は、それが笑い話の種になります。笑いな



▲発足して18年の「回覧ノート」。グループが意見を出し合ったノートも150冊
余りになった。

いろいろな教えてもらったり、苗が余っていると聞けばもらいに
ったりして楽しんでます。獣医さんが往診の帰り家に寄ってくだ
さった時、一向に太らないプロックリーの苗を眺めて、気の毒に思
ったのか「これはアメリカの方を向いておるぞ」の一言で大笑い
です。

・京都府 Uさん 94年4月10日

桜の花も満開で、今を盛りのこの桜の花もやがてはハラハラと散
り染めし…細川サンの突然の辞任表明にも命のはかなさを感じてい
る私です。不平不満だらけで毎日をタラタラと無意味に暮らしてい
る私だけど、このあたりで命のはかなさについて考える必要あり…
アスネ。たつた一つしかない命、毎日をもっともっと大切に有効に
生きなければ…と深刻に思えてしまう昨今です。有効に無駄なく…
と言うけれど、健康で仕事をしていることは、無駄ではなく有効に
過しているところだと思います。

・広島県 Mさん(42歳) 94年4月18日

春の気候を三寒四温とはよく言ったものです。きのう、おととい
は25〜26℃もあるよい天気だったのに今日は、雨になってしま
いました。まだ、我が家のこたつが離せません。朝晩はちよつと必
要ですヨ。この雨で桜はたぶん散ってしまうでしょう。山々はつ
じてピンク色に染まっています。このごろの米不足といつたこと、
今年の稲づへりは真剣に取り組みましよう…と、主人と話している
ところです。とは言っても兼業ですので、やっぱり手抜きになるか
も…。昨年父が亡くなったのでこまごましたところは、やはり見落
とすでしょう。でもまだ元気のいい母(77歳)がいるので少しは安心
です。

・北海道 Kさん 94年6月28日

大変大変申し訳ありません。長〜い間ノート止めました。ようや
くお昼休みなどゆつくりペンをもてる時がきました。3月中旬から
ずっと農作業が続きました。5月28日の雨の後、間に一度夕立が10
分ほど、そして昨日(27日)半日の雨。雨なし/6月でした。

そして農休日も一日もありませんでした。北海道の農家は、雨の

日以外は働く／働かざるを得ません／というのか、晴天の日に休むなんてとんでもない話／です。(田植えは雨でもしますが…)近所の人達も家族もみんなカラ梅雨で、つかれきりました。仕事は進んでいるけど…。今春は、田植え以外は人を雇用しませんでした。そのせいで忙しく働きました。雇用費をかけないということはこういうことかと、思い知りしました。

そんな中でウエムラさんの大賞受賞おめでとございませう。
『まなびすと大賞』…ウエムラさんの人生への受賞だと思えます。
心よりおめでとございませうとお願いしたいですね。

・和歌山県 一さん (44歳) 94年7月27日

今年の梅雨はカラ梅雨で、殊の外暑さ厳しく連日の熱帯夜・35度を超える気温にも体が慣れてきたと思っていた矢先、夏力せをひきダウンをしてしまいました。二日間、主人と小4の息子が食事作りをしてくれましたので、大変うれしかったです。家族つて有り難いです。主人は私の好きなもの、シュークリームや、卵豆腐、コマ豆腐、バナナ等買ってきてくれるし、やさしい家族を持つて幸せです。思いやりですね。

9日未明(現地時間8日午後、宇宙に飛び立った向井千秋さんが、無事、23日午後7時38分帰還され日本中が、いや世界中が喜びに包まれました。「地球を丸ごと見たい」夢を実現させ、心臓外科医から転身して9年、辛いこともたくさんあったでしょうに何と素晴らしい女性でしょうと、思いました。あのさわやかな笑顔がとても印象的でした。

・愛媛県 丁さん (46歳) 94年8月12日

毎日毎日日本当に暑いです。台風7号が少し雨を降らせてくれたけど、その後は1〜2回の夕立で、水不足が深刻です。四国は香川県

が大変。愛媛も松山市は断水していますが、私の住む町は、山もあり緑が多いせいかな田舎なので今のところ水はあります。田んぼも今年はよく出来ているし、ブドウも今までは盆すぎにしか出していないかったのに、7月末に少し出荷したり、やはり天候がよかったですいでしょう。

・京都府 Yさん 94年8月27日

記録的な晴天続きもやっと落ち着き、少し秋らしくなってきました。秋野菜の種まきもほとんど終わりましたしばらく世話がかかります。

・鳥取県 Hさん 94年9月

秋風が心地よいこの頃です。ノート遅くなり申し訳ありません。何かと忙しくて書く暇がなかつたと言えは嘘になりますが、今年の干天などで果樹園の水やり等忙しくしてありました。梨の収穫もあと一週間ほどになってしまい、今追い込みの時です。今年は夏の異常気象で梨の出荷量も少なく早く終わるようです。果物類は、糖度が高く近年ない甘さだということですね。

今、稲刈りのシーズンです。これから柿の出荷が始まります。道端にコスモスの花が咲き風に揺れています。娘の結婚式が10月8日です。タンズなどの荷を出すのが10月3日で毎日、何を持って行くぞうかと頭を悩ましています。

・石川県 Sさん 94年10月13日

町の婦人会が企画した、秋の味覚巡りマキノフリ拾いとまつたけづくし。日帰り旅行に出かけてきました。いつもの年なら主人と小旅行を楽しみますが、娘の出産予定が17日なので諦めていたのに、このような企画が飛び込んできて思い切って参加しました。

さて、経済的な豊かさが人間の幸せとする社会全体のムードがあまりありません。人より優れた稼ぎ手になる為、親は子供の教育に熱心になり、人が生きるために必要な根本的な心を失いかけています。押し寄せてくる煩わしさや悲しみは私たちの生きている間はよけて通れるものではありません。そのことを真正面からアタック出来る努力と精神力を培う場所、それが家族であり家庭ではないでしょうか。私も人生五十年を乗り越えたのを節目に、また、おばあちゃんになるのを機に：自分を一歩さがつて、冷静にみつめていける心の広さをもって日々を過ごしていこうと思っています。

・岩手県 Oさん 94年10月15日

長女も嫁ぎ、次女も…。娘の幸せを願って嫁がせる妹ですが、姉の家が二代目なのに対し、次女が嫁ぎ行く家は十一代続いた本家筋です。それなりの荷を背負うことになるでしょうが、相手(婿)が不足無い人柄なので、幸せになること間違い無さそうです。手離してやる娘がいておしくてなりません。新婚旅行はオーストラリアなそうです。豪華だと思いませんか。それとも今時、あたりまえだと思いますか。

・茨城県 Uさん 94年11月15日

北には雪の便りの聞かれる頃になってしまいましたね、今頃になると、また今年も終わってしまうとあせつてしまいます。ノートが着いてから11月11日、12日と近所の友達と、一泊三日で熱海へツア―旅行に参加してきました。六人なのでまとまりもよく、帰ってきて食事をしながら来年もまた行くこうね、親が元気な今のうちだものという事に決まりました。のんびり温泉に入り、何もしくなくていい旅は、行き先などどこでもいいネという人ばかり。箱根のあたりは、ちよつと紅葉して、富士山も素敵でした。



▲「回覧ノート」は、北から回るノートと、南から回るノートの2冊が発行される。

・神奈川県 Tさん 94年12月16日

12月になったのに暖かい日がつつき、例年になく紅葉がきれいです。反面、いつまでも葉が落ちないので、「お正月の支度が出来ない、植木屋さんに来てもらうのを延ばした」と言う友もいます。

ノートが届いた日、我が家に嬉しいニュースが入りました。長男夫婦に子供が出来たとの知らせです。待ちに待った知らせです。主人と二人で手を取り合って喜びました。

・新潟県 Mさん 95年1月2日

あけましておめでとうございます。皆さん新年いかがお過ごしでしょうか？ それぞれにいいお正月の過ごし方をされていることと思います。私と云えば、お正月に大掃除をしています。暮れまでになんとかやれるだけの仕事をし、やっとゆつくり掃除が出来る状態なのです。三箇日は来客がないので本当にのんびり出来るのです。この三箇日の間にできるだけ自分のやるべきことをこなすか…時間の経つのも忘れてやっています。時々「うるさいからやめてくれ…」なんて声も聞こえてきますが、やるからには「トントン」やらなければ気が済みませんからね。

今年も一年がバタバタ過ぎていくような気がしますが、それが自分にとつて充実していれば幸いと思っています。最近地震が度々ありましたがその地の方々は大丈夫でしたか？ 大きな災害がなければ…来なければと願っています。防ぎようのない自然災害は本当に怖い、恐ろしいものですよね。当地は今、無雪状態ですが、例年1月から2月にかけて降雪がありますので大雪にだけはならないほしいと思っています。

・和歌山県 Tさん(50歳) 95年1月18日

兵庫県南部地震が起きました。M7.2大変な被害が発生し大変です。戦後最大の地震とか、都心部で集中的に被害が大きくなっています。被災者の皆さんのお見舞いを申し上げます。頑張ってください。

・千葉県 Sさん(29歳) 95年1月31日

元旦は、親子で過ごしました(いつも大家族の中ですが)。長い砂浜が続く九十九里海岸にて、すばらしい初日を拝みました。今年も、一年無事で過ごせるように願いました。年末に起きた三陸はるか沖地震のことが頭をかすめていましたが(八戸付近に友人が三人います)…どうやら大したことはなかったようで安心してました。しかし、地震は益、正月関係なしにやってくる。1月17日の大震災は日本中の人々を震え上がらせたことと思います。知人の家はガス、水道が止まり「今にも家が倒れそうだ」と、先日やつとながった電話で言っていました。遠く離れているし力になれないのがつらいです。

今度は関東だ…と騒がれてる中、不意を衝かれたように関西地方で起こってしまった。そろそろこちらも危ないようなので気をつけないと…。でもこればかりは、いつ来るかわからないだけに、毎日ビクビクしています。いくら関東地方の人は地震慣れしているとは言えいざとなるとどうなるか…。タンスを(金具で)止めたり、高いところの物は片つける、懐中電灯は各部屋ひとつ、etc…。ああ…恐ろしい。この厳しい寒さの中、不自由な避難所生活をしていかなければならない人達のことを考えると警戒は禁物…今、こうしていられることに感謝しなくてはと思います。小さなことに、ハラを立て不満を思うことは、とても愚かなことなのだと思っています。

・徳島県 Oさん 95年2月11日

久しぶりの「ともしび」ノート「懐かしく読んでいます。阪神大震災一あんなにすてきだった、あの神戸が見るも無残な焼け野原となつてしまい、被災された多くの人たちの日々を思うと飛んでいってお手伝いしたいのに、出来ることは募金くらいです。

今回くらい人々が助け合う姿を見たことはありませんでした。被

「ともしび会」のネットワーク

北海道 6

東北 3
(岩手 2 山形 1)

関東 9
(栃木 4 埼玉 1)
(茨城 1 群馬 1)
(千葉 1 神奈川 1)

信越・中部 5
(長野 1 新潟 2)
(岐阜 1 石川 1)

関西 5
(京都 2 兵庫 1)
(和歌山 2)

山陽・山陰 4
(広島 1 鳥取 2)
(山口 1)

四国 3
(徳島 1 愛媛 2)

九州 7
(福岡 1 佐賀 1)
(熊本 2 大分 2)
(宮崎 1)

土とペンで結ばれた仲間たち42人

害をつけ家が壊れている人たちさえ、他人を助け、また、ボランティアも多く生まれました。次男(23歳・関西電力勤務)も「こんなに恐ろしい光景を見たのは初めてだ。つらい、本当に気の毒でつらい」と。□の重い子ですが「自分たちは元気だから、とにかく

んばって少しでも手伝いをしたい」と言っています。…今年は一月から大変なスタートですが、みんなで頑張って早く復興するよう祈るのみです。